2007 年度 修了

ベルグソンの直観論

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
山田　良憲

本研究は、ベルグソンの直観についての一考察である。ベルグソンが、「直観はどこまでいくだろうか。直観だけが、それをいうことができるであろう。直観は、一筋の糸を捉えている。その糸が天空まで延びているのか、それとも大地から少し離れたところで止まっているのか、それを見るのは、直観である」というように、ベルグソンの直観は、直観のみが教えてくれるものであり、分析や解釈を拒む。そこで本研究では、ベルグソンの直観に関する記述を取り出して、概念的に整理し、詳細に分析し、用語の解釈をするのではなく、芭蕉や良寛などの文学作品を援用しつつベルグソンの直観の世界を描いてみた。

第一章「直観から直観へ」では、直観の立場というものが、経験的次元にしか与えられず、直観を判断できるのは直観だけであることを中心として述べた。芭蕉の「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり」という言葉に見られるように、直観をもつ者は、領域を問わずに自分の直観から他の直観を理解することができるが、直観という言葉をいくら分析したところで、直観は現れないということについて考察した。

第二章「直観と分析」では、ベルグソンの「形而上学入門」を中心として、直観と分析の差異を検討することによって、直観が絶対的認識であるのに対して、分析は相対的認識にとどまらざるをえないということを示した。そして、「直観から分析へは移れるが、分析から直観へは移れない」のであり、直観が実在の直接的把握であるのに対して、分析は間接的把握でしかないことについて考察した。

第三章「直観と持続」では、われわれが直観的に把握できる実在である「持続する自我」を中心に考察した。そして、持続と直観の関係を述べることで、直観をもつために重要なことが、瞑想のような「精神の鍛錬」や自分自身を超えていくための「絶えざる努力」であることを見出した。

第四章「直観から創造へ」では、創造活動の源泉となる直観が、努力と密接に関連しており、創造的であるためには、古典へ回帰し、歴史が自分のうちに生きるまで、歴史と格闘する必要があることを示した。そして、古典への回帰から育まれた歴史的直観は、ベルグソンが、「精神による精神の直接の視覚」というものに通じており、良寛や道元のように、歴史のうちに生きることにこそ、直観の真面目があるという結論に至った。